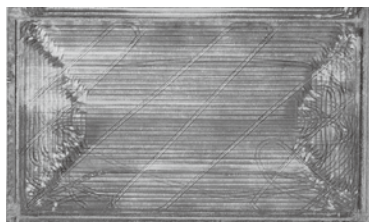


令和3年度に向けて

土づくり、ほ場づくりは雪解けと同時に開始

雪が多い年の春は低温と長雨に遭遇する可能性が高いです。春が近づき、ほ場の残雪を見てほ場内の高低差を確認し、耕起前までに高低差を修正します。また、雪が解けたら明渠施工やサブソイラ等で作溝し、ほ場に停滞する水を積極的に排水して、乾田化を促してください。昨年はワラが多い年でしたので、田植え後のワキに注意が必要です。乾田化により、土中に酸素を供給して未熟有機物の分解を促進します。JAの土壌分析結果を見ると、依然としてケイ酸不足傾向となっています。春先に必ずケイ酸資材を散布しましょう。ケイ酸が十分にあることで昨年のような低温曇雨天や高温登熟でも収量、品質を維持することができます。異常気象が当たり前の昨今、ケイ酸は安定栽培には欠かせなくなっています。



(脚注：サブソイラ施工後)

JA秋田おばこ土壌診断分析センターにおける 2017～2020.12月までの水田土壌分析値

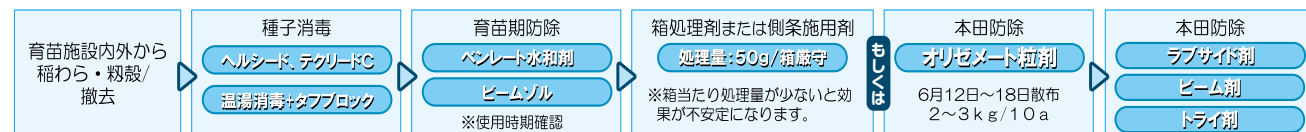
分析検体数：203 (mg/100g)

ケイ酸 平均分析値	目 標 値
12.6	15～30

いもち病対策の再確認を

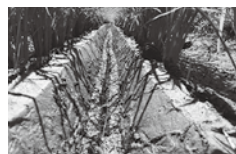
いもち病は種子消毒、育苗期防除、箱処理剤をしっかりと処理することによって防げる病気です。1 自分で出さない、2 他からももらわない、3 地域に広げないことを意識し、もう一度、基本を確認し、防除を確実に行って防ぎましょう。

県外産種子は必ずいもち防除をしてください。業務用向け品種や飼料用品種等に取り組む場合、取り寄せる種子は「無消毒種子」であることが多いです。よって、これらの種子も必ず種子消毒を行わなければ、いもち病やばか苗病、もみ枯細菌病などの病害が発生し、周辺ほ場へ拡散させてしまい被害が大きくなってしまいます。種子消毒には「テクリードCフロアブル」を使用し、他の県内産種子とは同じ桶で作業をせず、必ず分けて消毒してください。



中 干 し

年々、中干し実施時期が遅くなっています。中干しが遅くなると、梅雨盛期と重なるうえ、水を必要とする幼穂形成期がすぐ訪れるなど、十分な中干しを行うことが出来なくなってしまいます。中干しは、土中に酸素を供給し根腐れを防ぎ、根を下層を中心に強く伸長させ、根の活性化を図るために行います。根を土中にしっかりと張り巡らせることで倒伏に強くなるうえ、異常気象下での登熟でも根からの養水分供給により実りを支えてくれます。



適切な時期に中干しを行えるようにするには、健苗育成し適期に田植えをして十分に生育量を確保することで、余裕を持って中干しに向かうことができます。夏至の頃に生育調査を実施、生育量を確認し、適期に深水管理と中干しができるようにしましょう。

併せて、溝切りも必ず実施。暑い夏を耐えるためのインフラ整備で「溝1本1斗増収!」を目指しましょう。

もみ枯細菌病にご注意を

昨年発生した方は、今年対策が必須です。使用前に、催芽機、育苗器、育苗箱、被覆シート等全てを消毒。種子はテクリードCフロアブルで消毒。催芽～出芽まで30℃を超えないように、通気を良くし、ハウス内温度を25℃以上にしないよう徹底管理。

もみ枯細菌病の発病スイッチが作動しないように対策をしてください。

【対策】～徹底した温度管理と清潔な環境づくり～

種子消毒の徹底
(温湯消毒種子、テクリードCフロアブル)

緑化期からはハウス内温度
25℃以上にせず、風通しを良くする

発病箱は速やかにハウス外へ
※水を介して伝染します。

催芽から出芽までは
30℃以内で管理

育苗箱、浸種桶、催芽機、育苗器、
被覆資材等の消毒

過剰なかん水を行わない

昨年以上の雑草対策が必要です

昨年、残草したほ場には大量の種子が落ちており、今年は昨年以上の発生が見込まれます。田面を均平にし、散布時に水をしっかりと張る、草種に対応した除草剤を選択するなど、除草剤の効果が十分に発揮させられる環境づくりを基本に、初期剤と一発剤の体系防除としてください。取りこぼし雑草が花や穂を付ける前に、中後期除草剤を散布し、次年度へ種子を繰り越さないようにしてください。また、雑草があるところには斑点米カメムシ類が集まりますのでご用心を。

No.7



農業技術情報

令和3年1月発行

発行：秋田おばこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所

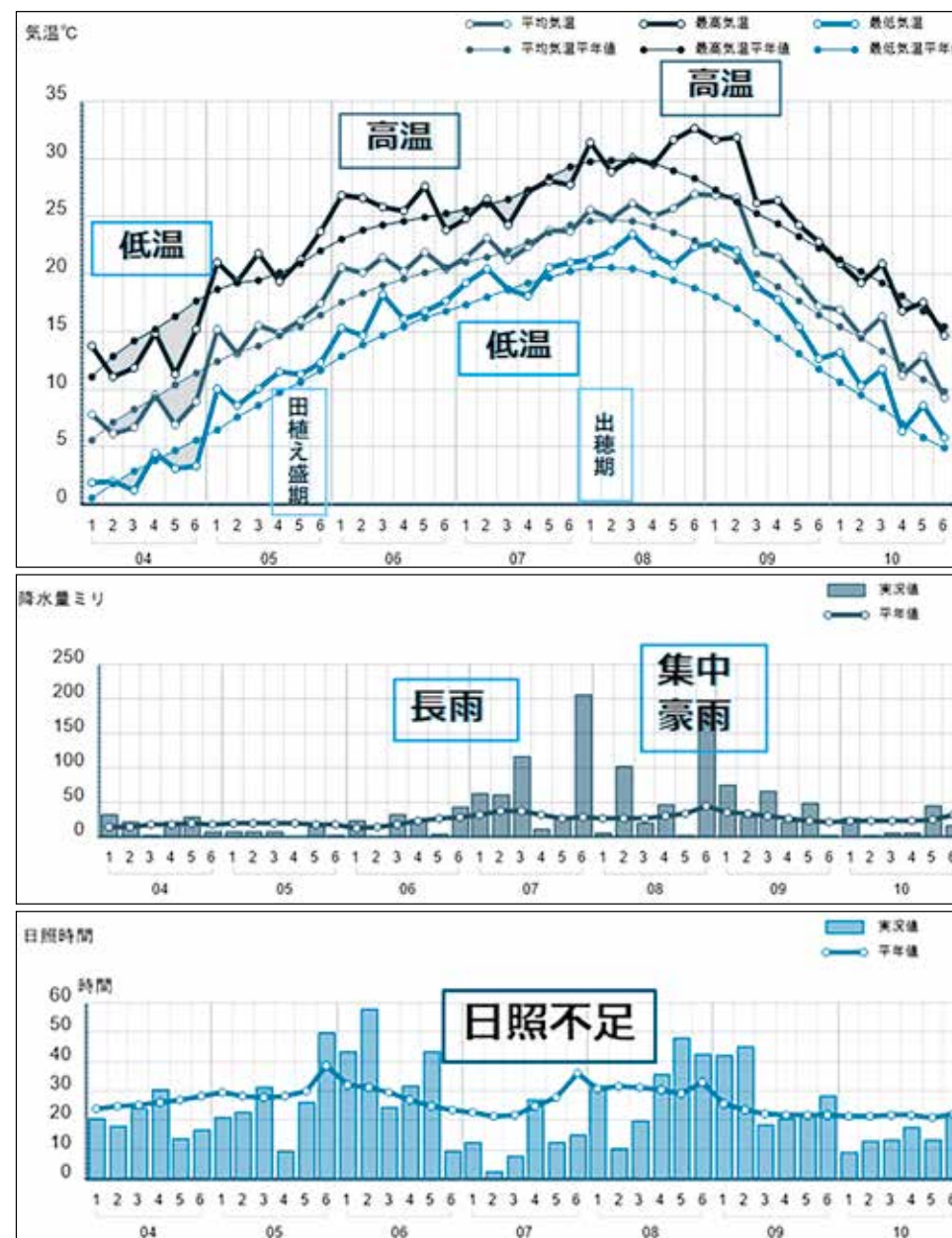
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課



令和2年度 総括版

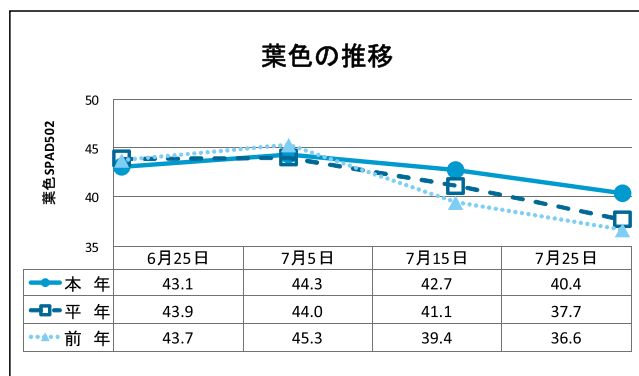
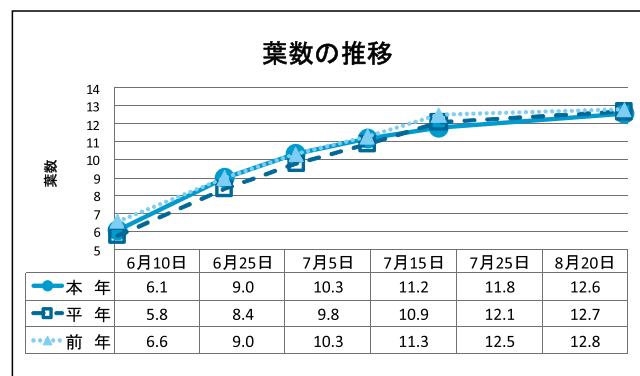
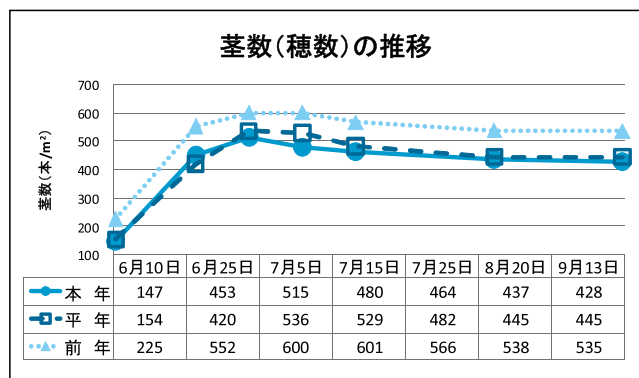
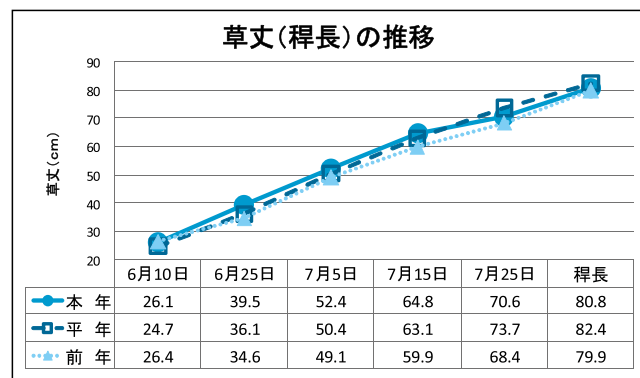
令和2年稲作を振り返ります。皆さん自身の作業を思い出しながら、来年度の対策を考えていきましょう。

令和2年度気象経過 (令和2年4月～10月、半旬別、アメダスポイント大曲)



令和2年は暖冬による極端な小雪となり早い雪解けとなりました。しかし、4月に入ると日照時間が少なく低温が続く、5月に入りようやく天候が回復し、6月にかけては高温傾向が続きました。梅雨入りは6月14日でした。6月後半から低温と日照不足が8月3半旬まで断続的に続き、この期間中のものを合わせて9月までに3度の集中豪雨がありました。令和2年は梅雨明けの発表はありませんでした。8月4半旬以降、一転して天候が回復し、気温の高い日が続きました。

生育概況



4月

令和2年の播種盛期は4月26日(平年差+1日)でした。4月2半旬以降の気温が平年より低く、出芽の遅れが一部で見られましたが、5月1半旬以降は天候に恵まれたため、その後の苗の生育は概ね順調でした。また、雪が少なかったことから、春作業は順調に始まり、耕起作業始期は4月27日(同差-2日)でした。

5月

田植始期は5月16日(同差±0)、田植盛期は5月24日(同差±0)でした。田植初期の5月15~19日は低温でしたが、その後は好天に恵まれました。

6月

6月10日の草丈は長く(平年比106%)、茎数は少なく(同比95%)、葉数は多く(同比+0.3葉)になりました。6月25日の草丈は長く(同比109%)、茎数は多く(同比108%)、葉色は平年並(同比98%)、葉数は多く(同差+0.6葉)になりました。6月は気温が高く、日照時間も多かったことから葉数の増加も早く、分げつの発生は順調でした。

7月

7月6日の草丈は長く(同比104%)、茎数は少なく(同比96%)、葉色は平年並み(同比101%)、葉数は多く(同差+0.5葉)になりました。7月16日の草丈はやや長く(同比103%)、茎数は少なく(同比91%)、葉色は濃く(同比104%)、葉数は多く(同差+0.3葉)なり、既に幼穂形成期に達したほ場が多く見受けられました。ほ場により生育ステージに差がありますが、7月16日の生育データを用いた生育栄養診断では、籾数がやや多いとされる「Ⅳ型」の地点が多くなりました。
7月22日の草丈は短く(同比96%)、茎数は少なく(同比96%)、葉色は濃く(同比107%)、葉数は少なく(同差-0.3葉)になりました。※例年7月25日に行う調査を令和2年は7月22日に行っています。

8月

出穂期は、8月3日(同差±0日)で平年並みでした。8月4半旬以降は気温がかなり高く、日照も多かったことから登熟は概ね順調に進みました。

9月

刈取始期は9月19日(同差-2日)でやや早く、終期は10月10日(同差±0日)で平年並みとなりました。
また、令和2年は例年よりも倒伏程度が大きくなりました。8月5半旬~9月1半旬の間に最大1時間降雨量が50mmを超えた強い雨が降った地点が確認されました。登熟前半の日照不足により稲体が軟弱となったことに加え、強い雨が重なったことで倒伏が助長されたと考えられます。

作柄概況

水稻定点調査ほにおける10aあたり収量(篩い目1.90ミリ)は、599kg/10a(平年比103%)でした。

調査地点ごとの収量については、気象の影響を大きく受け、穂数不足や倒伏の影響で平年比85%となった地点が見られた一方、春先から茎数を順調に確保できた地点では平年比115%となるなど、ほ場間差が非常に大きくなっています。

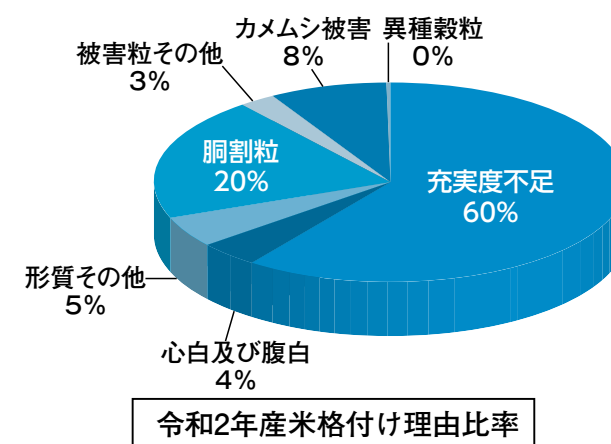
収量構成要素を見ると、㎡当たり穂数は428本(同比96%)で少なく、一穂籾数は70.1粒(同比102%)でやや多く、㎡当たり着粒数は30.0千粒(同比99%)で平年並みとなりました。登熟歩合は84.6%(同差-2.4ポイント)とやや低く、千粒重は22.2g(同比98%)でやや小さくなりました。

令和2年12月23日現在のJ A秋田おばこの1等米比率は97.9%と高くなっています。登熟期間の高温が影響したと考えられる充実度不足や、胴割れの発生、斑点米カメムシ類被害により落等しています。

なお、令和2年12月9日に東北農政局が公表した県南地域の作況指数は「105のやや良」となっています。

J A秋田おばこ管内1等米比率
(令和2年12月23日現在)

大 曲	98.0%	角 館	97.4%
協 和	94.9%	西 木	95.7%
西仙北	98.5%	田沢湖	100.0%
神 岡	94.1%	千 畑	99.8%
南 外	98.4%	仙 南	93.5%
仙 北	100.0%	六 郷	100.0%
中 仙	97.1%	全 体	97.9%
太 田	95.8%		



	玄 米 重 kg	穂 数 本/㎡	一穂籾数 粒/穂	㎡当り着粒数 千粒/㎡	登熟歩合 %	千 粒 重 g
本 年 値	599	428	70.1	30.0	84.6	22.2
平年比・差	103%	96%	102%	99%	2.4%	98%
前年比・差	95%	80%	109%	88%	2.8%	97%

病害虫の発生状況 ~ 病害虫防除所調査から ~

いもち病

葉いもちの全般発生開始期は7月1半旬(平年7月2半旬)でやや早く、発生量は多くなりました。全般発生開始期が早かったことと、7月は日照不足と低温、8月4半旬以降は降水量が多く、気温が高い気象となり、いもち病の感染に好適な気象が断続的に続いたことから、穂ばらみ期の葉いもち発生量はやや多くなったと考えられます。穂いもちは、穂ばらみ期の発生量がやや多かったことから、穂揃期の上位葉発病株率が高くなり、収穫期の穂いもち発生量は多くなりました。

斑点米カメムシ類

斑点米カメムシ類による被害粒の発生は多くなりました。8~9月の本田内での斑点米カメムシ類の発生量は平年よりやや少なかったものの、8~9月気温が高く推移したことで、斑点米カメムシ類の活動が活発になったこと、また、割籾率が高まったことから、斑点米混入率が高くなったと考えられます。

紋 枯 病

大仙市における紋枯病の初発は8月4半旬(平年8月2半旬)で遅くなりました。前年よりは発生が少なかったものの、茎数の多いほ場を中心に発生が見られました。

コバネイナゴ

コバネイナゴの発生時期は早く、穂ばらみ期のすくい取り数も多く、発生地点率も高くなりました。近年薬剤による防除圧が低下してきているため、発生量が増加傾向にあります。